慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	金原さんの風景
Sub Title	In memory of Kimbara “San”
Author	立石, 弘道(Tateishi, Hiromichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.46 (2005. 3) ,p.3- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20050331-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金原さんの風景

立　石　弘　道

私はあまり記憶の良いほうではないのだが，それでも私には金原さんの姿が時々目に浮かぶ。金原さんがいる場面は，ある風景がかもし出す，独特の雰囲気が出てくる。「金原さんの風景」として話を進める。

私が慶應の大学院に入学したのは今から約 40 年前の昭和 43 年だった。そのとき金原さんは文学部の助手を務めながら博士課程に在籍していた。なんだか気が合い，それ以来の付き合いになった。当時，私は金原さんのガールフレンドで，あとで奥さんになる寺西さんの家から歩いて 5 分の，杉並の阿佐ヶ谷駅の北側に住んでいた。彼はふらっと立ち寄ることもあった。その後，私は自由が丘の近くに移り，弟と一緒に生活した時期もあり，金原さんが遊びに来ると，弟も交えて金原さんと談笑したものだった。弟は金原さんには独特な風格があるねと認めていた。

そのうち金原さんは寺西さんと結婚し，田園調布に近い，沼部のアパートの 2 階で新婚生活を送っていた。私は気が向くと，気軽に押しかけた。ある夏の夕方に行くとちょうど夕御飯時だった。金原さんがゆかた姿で日本酒を飲みながら冷奴をつついていたのが今でも目に浮かぶ。そのとき多分ご馳走になったと思うが覚えていない。なぜかというと新婚生活の幸せそうなまぶしい金原さんの風景があまりにも強かったためだ。その幸せは奥様がかなりもたらしてくれたものだと私は思っている。奥様は，確か立教女学院から慶應に進んだ方で，都会育ちのお嬢さんらしさをいつまでも失わない，あらゆる意味でユニークな方だった。

話は前後するが，昭和 43 年の夏休みに，軽井沢の塩沢にある土屋家が

経営している塩沢山荘に金原さんと泊まったことがある。塩沢が気に入って，その後，院の 2 人の女性の同級生とその友人の計 3 人の女性と金原さん，私の弟で塩沢に数日合宿して午前は勉強，午後は散歩やハイキングを楽しんだ。それに金原さんが慶應の交換留学生として学んだスタンフォオード大学での友人のジョンも加わって，軽井沢の碓氷峠の見晴らし台までピクニックをしたときのことが印象が特に今でも残っている。ハイキングコースを登り始めるとすぐに，ジョン君が「こんなすばらしい自然なのにどうして日本人は登山道にゴミを捨てるのだろう」と言って，ビニール袋を取り出してゴミを拾い出した。我々もなんだか悪い気がして一緒にゴミを拾いながら不思議なハイキングをした。今になってみると，私にとってのアメリカ経由のエコロジー運動の第一波だった。その後，私はあまりに自然に恵まれすぎている日本人がなんとも思わずゴミを投げるのに，だんだん苛立ちを覚えるようになった。これは，エコロジーの運動が盛んになってきたこともあるだろうが，40 年前のジョン君に日本人を代表して叱られたような場面が原点だと思う。私の自然保護への関心は，間接的には金原さんが媒介になってくれたのだろう。感心したのは，金原さんは 180cm という長身のせいもあるが，ジョン君に特に気を遣うでもなく，ごく自然に，一対一の人間関係を築いていたことだ。金原さんは矜持を保つ人であった。

余談になるが, 当時まだ塩沢地区ではテニスはそれほど盛んでなかった。「これからはテニスブームになるからコートを何面も作ってテニス村にしたらいいのでは」などと薦めると，土屋さんがその話に乗って 20 面ほどコートを作り，その後塩沢地区はテニス村になってしまった。今でも土屋さんとは付き合いがある。今年の夏しばらくぶりに一泊したときに 40 年前にここに金原さんと来たのだなあと思ったことだった。塩沢地区は，私と金原さんが初めて泊まった時の，思い出のなかの古里のような村とはすっかり違って垢抜けしてしまった。

私が英国に留学したのは昭和 50 年の春からで，2 年と少しだったが，

金原さんがちょうどロンドン大学に留学中だった。ロンドンの金原さんはたしかハイゲートという地区に部屋を借りていて，ふたりで散策しながらマルクスの墓に行った。近くのレストランで一緒に食事をしていたとき，老人がひとり犬を連れて食事をしていたが，その犬が小一時間近く，忠犬ハチ公のように動かない。少し動くとすかさずその老人が何か言う。すると犬がすぐにピンと姿勢を正す。私はびっくりしてその見事さに驚いたのだが，金原さんは「イギリスの犬は犬らしくないよ。ああいうふうに人間以上に動物らしさを失ったり，散歩に行って歩き疲れてダッコされて帰ってきたり，日本の放し飼いされている野良犬みたいに元気一杯の犬が本来の犬だよ。」と言ったのを覚えている。私の研究対象のＤ．Ｈ．ロレンスのようなことを言う。これは彼の文明批評につながる言葉なのだが，いかにも金原さんらしいと思ったのだ。その後，今度は私が住むことになったケンブリッジ郊外のマディングリィ・ホールにも遊びに来た。そのとき金原さんのロンドン大学の友人で，宮沢賢治を研究していたジョンという友人を紹介してくれた。彼は実にインテリで，その後２年間ときどき食事をしたり，彼が泊まりに来たり，ブライトンの海辺で数日過ごしたりしたが，英国人の奥行きの深さを教えてくれた一人だ。

金原さんは他にも自分の友人をかなり紹介してくれた。たとえば，私が修士課程を終えて日吉で非常勤をはじめたとき，当時，日吉の専任であった英語の先生方を昼食時に次々に紹介してくれた。当時の先生方は今では全員停年退職されたが，それでも年賀状の交換は，すでに物故したり，また私が住所録に転居先をメモしなかったために途絶えた方を除いて，40年近く続いている。金原さんに感謝しなければならない。

一昨年の12月20日頃，夕方６時直前だったが，通信教育の授業に向かおうとしていたとき，三田の研究棟の前で偶然金原さんに出会った。窓からこぼれる明かりのなかで，金原さんは「会議が重なってこれからもうひとつだよ，それにしても立石君よくやるねー」と言って，研究棟にあわただしく入っていった。私が金原さんに会った最後の姿だった。２週間後

の年賀はがきには，愛用のモンブラン 149 の太字で，「立石君，通信でやるとは体力があるねー」と書いてあった。これが最後の便りになった。私は最近は体力も落ちたのだが，金原さんからみると生活力があり，エネルギッシュに見えていたようだ。確かに若い頃から金原さんはすでにどこか浮世離れをした感じがあった。モーツアルトを聴いて，好きな読書ができればそれで満足だ，と言っていたし，また実行していたと思う。昨年秋，日吉での金原さんを偲ぶ会の席上，金原さんの教え子である院生が「金原さんは英国中世の教会音楽のコラールも好みだった」と言うのを聞いて，金原さんのクラシック好きは素人の域を超えていたのかと気がついた次第だった。金原さんはオーディオは割にこっていてタンノイの大きなスピーカーがお気に入りだった。

タンノイといえば，私が新婚旅行でイギリスに行ったときに，金原さん推薦のタンノイのスピーカーを現地で買って送らせた。金原さんが教えてくれたロンドン郊外のスタジオに，半日かけて出かけて購入したのだ。そのとき気を利かせてスピーカーに合うアンプ類まで買った。配達されたスピーカーは気に入って，今でも使用している。アンプ類は周波数が日本と違っていて失敗した。金原さんは秋葉原に連れて行ってくれて，スピーカーに合うボックスを探してくれて，割に安く私のオーディオはそろったのである。私が聞くオーディオは実は金原さん好みの音であるが，私はクラシックはタンノイで聞くのが一番いいと今でも信じている。靴と女房と友人は古いのにこしたことはないという言葉がイギリスにあるらしいが，古い友人はもちろんのこと，古いタンノイも捨てたものではないと思う。

私が昭和 57 年に帰国後，家内と，ある夜金原さんを訪問した。当時，金原さん一家は，奥さんの実家の阿佐ヶ谷の寺西家にお子さん二人と住んでいたが，お子さんもまだ小さく，幼稚園の話などをしたのを覚えている。それからしばらくして突然奥様の訃報を聞いて驚いた。

その後金原さんは鎌倉に居を移して，25 年近く，一人で二人のお子さんを育てたが，男手ひとつで大変だったようだ。家も遠くなり，行き来が

できなくなったので，電話をすると，お子さんに朝御飯や弁当まで用意してやっているのが分かった。再婚をしたらどうかなどと余計なおせっかい話を 2, 3 度出したことがあるが，その気にはなれなかったようだ。私も亡くなった奥様があらゆる点で，金原さんにお似合いだったので，無理強いする気も起きなく，よくやるなあと感心するだけだった。電話ではなかなか話したいことも話せないので，ゆっくり会って話しましょう，と言って終わることが多かった。金原さんは，たしか妹さん所有の那須の別荘によく来ていたし，私も那須の山小屋で過ごすので，一度夏休み中に遊びに来て下さい，と毎年のように電話で話したのだが，お互いに行き違いが多く，実現はしなかった。私もここ 10 年近く忙しすぎたし，学校で時々顔を会わせることができたし，あと 2, 3 年して時間ができたらインドあたりに金原さんに連れて行ってもらおうなどと勝手に思っていたのである。

昨年 4 月 28 日，三田の講師室で，金原さんがクラス担任をした教え子である辺見助教授に金原さんが 4 月 20 日になくなったということを聞いて，その日のうちにお焼香に同道させてもらった。今こうして金原さんの想い出を書けるのも, 辺見さんが声をかけてくれたおかげでお焼香ができ，ひとつの区切りがついたためであり，辺見さんに本当に感謝している。金原さんの住いは，昔なら，人里はなれたという感じの，郊外の大きな一軒家だった。金原さんから名前の由来を何度も聞いていたご長男の宏光君が対応してくれた。金原さんは，この大きな一軒家，特に広いフローリングの一階で，タンノイのスピーカーで大好きな音楽を聴いて，読書をしていたのだった。広い庭にはこれから咲き誇るのを楽しみにしているかのように，所狭しといろいろな花や庭木が生い茂っていた。

平成 16 年の年の暮れも押し迫って，年賀状用の住所録を整理していたとき，物故された方々への想いが頭をよぎったが,「金原正彦」の欄に来たときは，住所は消去したものの氏名まで削る気持ちになれず 2, 3 日そのまま残しておいた。だが金原さんは飄々として現れ，すがすがしく消えるのだと思い当たって，納得して抹消した。今，昔を思いながら書き出し

てみると，忘れてしまったと思っていたシーンが次々に浮かんでくる。そして昔読んだ「想い出は狩の角笛……」という詩を思い出す。金原さんの姿が現れるシーンは，古い写真館にあるような昔を偲ばせるセピア色の風景になってしまっている。私にとっては金原さんの風景は，セピア色が一番ふさわしい。